

## 指示表現 it と that の解釈と関連性

山 田 大 介

### 0. はじめに

Grice (1975) が、発話の暗示的側面の解釈に推論が欠かせないという革命的議論によって会話の含意を持ち出して以来、語用論の興味は1つの発話が暗示的 (implicitly) に何を伝達するのかということに専ら向けられてきた。しかしながら1つの言語表現による発話によって明示的に表出される命題、すなわち Grice のことばで言えば「言われていること」(what is said) への関心も前者に劣らず重要である。Grice は発話の明示的側面を、発話の真理条件に関わるものと考え、したがって意味論的分析を維持した。関連性理論 (以下 RT) は、命題形成の過程においても、言語形式のもつ真理条件的意味に加えて、推論による語用論的側面が含まれると考えたのである。

RT は発話によって話し手の伝達しようとする意図した意味を2つに区別する。1つは明示的側面としての命題内容であり、これを表意 (explicature) と呼ぶ。他は暗示的意味、すなわち推意 (implicature) である。例えば次のやりとりを考えてみよう。

- (1) a. A: Is your car a Mercedes?  
 b. B: I wouldn't drive any expensive car.

(1b) の表意はここではおよそその命題形式である。その命題形式は、(1a)

の質問に直接答えていないが、A が高級車について百科事典的情報を即座に呼び出すよう仕向けられている。その情報の中には「メルセデスベンツは高級車である」という情報が含まれていて、それを含む文脈の中で処理されると (1b) は「B の車はベンツではない」という結論を推意として生み出すであろう<sup>1)</sup>。

本小論は、発話の明示的側面である表意の 1 つの指示付与に関わる。次の例で、

- (2) a. She put it there.  
b. Susan Smith put the 2nd edition of *Relevance* on my desk in the library.

(2a) は例えば (2b) のような命題形式を話し手が伝えようとしているとしよう。この時、聞き手は推論を駆使して、she, it, there が指し示している対象を復元するのである。具体的にはこの小論で (3) と (4) に示される it と that について、その解釈はどう行われているのかを考察する。

- (3) She bought a blanket during her lunch hour  
and brought a. it back with her to the office.  
b. that

- (4) Tom knew that Joanne wanted to sell the car,  
and a. it bothered him considerably.  
b. that

(Kamio & Thomas 289, 290)

Kamio & Thomas (1998: 以下 K&T) によれば、(3a) と (3b) は、彼女が昼休みにブランケットを買ってきて、オフィスに持ってきたということで、(3a), (3b) はともに容認されうるものであるとしている。また、(4) では、トムを困らせていることは、ジョーンが車を売りたいがっているということにあり、(4a), (4b) はともに容認される。両者の指し示すものはどのように異なる

のか。本稿では、この2つの指示表現に関して、RTの枠組みで、話し手の意図した解釈を聞き手が得るために、発話内容と文脈想定（または文脈情報）がどう絡み合っているのかを見ていきたい。まずK&Tの*it*と*that*の議論を検討し、両者の違いがうまく説明出来ないことを示す。次に2において語用論的発話解釈にあたって選択的な役割をされると考えられる呼び出し可能性 (accessibility) の概念を提示し、3ではこれを使って*it*と*that*の差異を論じていく。

## 1. 先行研究 —— Kamio & Thomas (1998) ——

(3)と(4)から分かるように、*it*と*that*は交換可能な前方指示代名詞 (anaphoric pronoun) として扱われる。このセクションでは、K&Tが*it*と*that*の差異についてどのように主張しているのかを見ていく。語用論的観点から、指示語の*it*と*that*を比較・検討するにあたり、Linde (1979) やフランス語を例にとったSchiffman (1985) の見解を交えながら、K&Tは以下のようにまとめている。

### Summary of some referential properties of English *it* and *that*

<i>It</i>	<i>that</i>
1. Represents speaker's prior knowledge ("already-learned" information)	1. Need not represent prior knowledge
2. Refers widely	2. Points narrowly
3. Information central to speaker's knowledge Linde: information in focus Schiffman: thematic material French <i>il</i> : represents old information (Coppieters)	3. Information peripheral speaker's knowledge Linde: information out of focus Schiffman: thematic material French <i>ce</i> : represents new information (Coppieters)

【abridged from K&T 304】

K&Tは、ここで*it*と*that*の差異を3つの点に分類し(上記1.2.3.)、さらにフランス語においての*il*と*ce*の差異にも言及し、日本語にも言及している。

本稿ではあくまでも、英語における *it* と *that* の差異、それも前方照応的關係に限って考察する。

まず第一の差異として、K&T は先行知識 (prior knowledge) との關係を挙げている。すなわち、*it* を「話し手の先行知識を示すもの (represents speaker's prior knowledge)」, いわゆる「話し手が既に知っていた知識」としてとらえ、一方 *that* を「話し手の先行知識を示す必要がないもの (need not represent prior knowledge)」と分析している。(5) において、

(5) 【A rushes into the room excitedly】

A: Guess what! I just won the lottery!

B: ??a. It's amazing!

b. That's amazing!

話し手 A の話す内容は、聞き手 B にとっては、「宝くじに当選した」という全く新しい情報である。この A の情報に対して B は「A が宝くじに当選した」という先行知識を持っていないという状況で (b) のように *that* の使用が自然である。対照的に、(a) の返答が極めてわざとらしいものとして解釈されるのは、この先行知識を既に持っていた、すなわち「A が宝くじに当選した」という事実を知っていたということになると K&T は説明する。

しかしながら、K&T はこの先行知識と *it* / *that* の使用の關係に例外が生じることがあると述べる。(6) と (7) を見てみよう。

(6) A: Fred arrived even later than Sally.

B: a. I know that.

b. I didn't know that.

c. I know it.

??d. I didn't know it.

(7) A: Janice fired her secretary yesterday.

B: a. Yes, I'm aware of that.

b. Really? I wasn't aware of that.

c. Yes, I'm aware of it.

??d. Really? I wasn't aware of it.

いずれの発話も、Aの発話内容に対してBが持っている先行知識の内容に関して返答するものであるという状況の下で、Bの応答のうち、(d)は語用論的に容認されない。すなわち、*it*の指示する内容に関して先行知識自体を否定する発話になってしまうからである。K&Tはknowやbe ware of, remember, recallといった動詞が否定文中で使われる時、*it*は容認されないと説明している。これらの動詞はいわゆる叙述動詞 (factive verb) と呼ばれるもので、後続する節の内容が事実であることを要求する。先行知識としてのAの発話内容を「知らなかった」「気づかなかった」「思い出せなかつた」とすることは語用論上意識されるものとは考えられない。意識できることは、その事実を際立たせることによって話し手の意識に新たにもち出す時である。論者は後の議論で(B)がこれを知らなかつた、気づかなかつたと述べる場合、先行発話の事実を際立たせ/ポイントし、その状況で*it*の使用が容認されないこと((d)の場合)を示すつもりである。

次に(8)の例を見てみよう。

(8) [Alice and Carl are long-term housemates, whose relationship has been troubled recently.]

Alice: [Alice comes home one evening: to confront Carl with some news.]

“Carl, I have something: important to tell you, Mark called me into his office this morning and said he wanted to give me Gino's job. He made me a great offer and I accepted it. But of course I'll have to move to San Francisco.”

Carl: [Carl stared at her in silence for a long moment. Then, forcing

himself to speak calmly, he said softly,]

“I hope it will make you very happy, my dear”

この場合、もちろんカールは、アリスの発話を聞くまでは彼女がサンフランシスコに引越さなくてはならないという先行知識はない。しかし、ここでカールの返答で *it* が容認されるのは、K&T によれば、*it* を含む発話がなされる前に時間的な空間が生じることにより (Carl stared at her in silence for a long moment.), アリスの発話で得られた知識は既に有していた知識としてカールは解釈する、というのである。(8) と同様な状況において、カールは間髪入れずに (9) のように返答したとしよう。

(9) Alice: “... But of course I’ll have to move to San Francisco.”

Carl: ??“It will be the end of our relationship!”

(9) での *it* の使用が、(8) と対照的に許容されにくいのは、サンフランシスコに引越しすることが既知のものとカールが捉えているということによると彼らは説明する。K&T は先行知識というものを最近得た情報 (recently-learned information) といわば定義しているが、問題は、recently-learned とはどの程度最近のものでなのか、(8) と (9) の「長い間」とか「間髪入れず」という意識がカールの発話においてどう関連するのかということである。

さらに (10) で、

(10) Fred may have told me that he wanted to be a pilot,

but I don’t remember     a. *it*.

b. *that*.

K&T によれば、*it* は「彼の言った内容も含めて話したこと全体」を指し示すと考えられ、したがって「Fred が仕事を辞めたがっているということを私に言っていたかもしれない」という前文の内容をさらに推し量らせることにも

なるが、一方、(10b) は that 節の「パイロットになりたかった」という特定のことがらを指し示すことになるのと彼らは説明する。両事象ともすでに与えられた先行知識となっていると考えられるから、そうなるのと先行知識に甲乙を区別することになるのだろうか。ここで、K&T は第二の差異として、指し示すことからの「大小」または「広狭」を持ち出すのである。

K&T は it と that をそれぞれ「幅広く対象を指す (refers widely)」ものと「狭く対象を指す (points narrowly)」ものという第二の基準を持ち出す。(11) において、

(11) [A middle-aged father and his 25-year old daughter are observing a young man on the street below pushing a baby stroller with an infant inside, evidently his own child.]

Father: Look at this! There's some young guy taking care of his own kid!

Daughter: You see a. it a lot around here, Dad.

b. that.

K&T は、この文に含まれている that と it には確固たる違いがあると次のように説明する。すなわち、it はコンテキスト内に存在する事実や出来事を「広く」言及し、一方 that は、it ほど多くのことを呼び起こさせるものではないというのである。(11b) の場合、娘は「このあたりではありふれた光景だ」と単に言っているに過ぎず、すなわち目下眼にしている光景を指し示している。一方、(11a) の場合、娘は「お父さんには珍しいかもしれないが、男の人が赤ちゃんに食べ物をあげたり、家事をしたりするのは（今どき）よく見かける／よくあることなのよ」などといったニュアンスも含まれうると説明している。

「対象の広さや狭さ」があることを、it と that の差異として説明しているわけだが、このことを指示する根拠として、K&T は wh-疑似強調構文の主語として that は可能だが、it は受け入れられないということを持ち出す。た

例えば,

(12) Georgia's plane is due to arrive on schedule.

Or at least a. it is what they told me over the phone.

b. that

wh-疑似強調文は「特定の文」であり、その主語は対照的・強調的根拠を持つものであり、故に it は許容されないと説明する。後に明らかにするように、wh-強調構文は、際立ちを作る構文であり、したがってその主語は対照・強調の受け手であること、すなわち際立ちを示すために that の使用をすると論者は分析する。

K&T が主張する両者の差異についての第三の特徴として、照応する先行詞そのものについても、it と that の違いが存在すると述べている。

(13) First put the vase on a table, then take a picture of a. it

b. that

例文 (13) において、K&T によれば、it の指し示すものは花瓶のみであり、that の指し示すものは花瓶だけではなく、テーブルと花瓶を一体化したものであるとしている。すなわち (13a) は、「花瓶」の写真撮ることを示し、一方 (13b) は花瓶だけではなく「テーブルとその上に置かれた花瓶」を1つのものとして考え、その写真をとるということを意味しているという。このことを it は “functions thematically”, that は “functions rhematically” と述べている。同様に (14) において、

(14) First square 19 and then cube a. it

b. that

it は「19」そのものを指し示すものとして考えられる。一方、that は「19を



2乗した答え」を指示し、それはまさしく作られた知識であるという。この論理は、it が広い範囲の対象物を、that が狭い範囲の対象を指すという主張と矛盾すると思われる。(13)においても that が「花瓶 + テーブル」を指し、it は「花瓶」を指すということであれば、「広い／狭い」という概念と矛盾している。さらに「花瓶」も「花瓶 + テーブル」も、「19」も「19<sup>2</sup>」もいずれも先行知識になり得るものではないか。

K&T にしたがって三点に分けて it と that の差異を検討してきたが、これらを見ていく中で、指示対象の復元は、発話の状況や話し手の考えなどに大きく左右されることは確かである。この意味で指示付与は語用論の対象なのである。K&T の解釈は、「先行知識 (prior knowledge)」や「対象の広さ (refers widely) や狭さ (points narrowly)」、「先行詞の大きさ (nominal ascendant)」の3種類に分別しているが、それぞれの特徴が明示的に説明されず、さらに分別したそれぞれが相互補完的でもない。それぞれがお互い矛盾しあう状態があることも明らかである。これらのことから考えても、これらの差異を論証したことにはならないのは明らかであろう。多くの場合、it も that も許容されるのであるが、問題は一方を選ばせるものは何かということ、あらゆる発話において一様に説明することが求められる。

語用論的発話解釈にあたって、話し手に一方を選ばせ聞き手が話し手の意図する対象を正しく復元するのであれば、そこにどういうメカニズムが働いているのか、RT の枠組みで「指し示すものに対しての呼び出し可能性」という概念を使って説明が一様に示されることを以下で主張したい。

## 2. 呼び出し可能性 (accessibility) と語用論的容認性

まず、この小論の拠って立っている関連性の原理と、議論に使う呼び出し可能性の概念を紹介する。

## 2.1 関連性の原理

人間の行動はすべからく関連性指向 (relevance-oriented) であるという認知上の基本的想定がそのままことばによる伝達へのアプローチを律する理論的基盤となると RT は主張する。人間は様々な想定を持っている。そして常に自分のもつ想定を増やし、不確定なものを確定なものとし、誤りであったことを知れば正しい想定に切り替えることを願っている。その想定 of 総和を認知環境と呼べば、認知環境を改善することを人間は願っているものであるといえる。認知環境の改善がもたらされたとき、認知効果が得られたということである。

一方、人間はできる限り労力を節約しようとする性癖を持っている。時間的、身体的、頭脳的コストのより低い方法で、同じ効果を得たいと思うものである。要するに認知環境改善につながる情報を、 unnecessary コストを払うことなしに手に入れることを常に求めているということである。このように unnecessary コストを払うことなしに、認知効果を持つ情報を「関連性を有する (relevant)」と呼ぶ。Sperber and Wilson (以下 S&W 1995) は次のように表現している。

(15) 第一の関連性の原理 = 認知的関連性の原理 (First or Cognitive Principle of Relevance) :

人間の認知は、関連性を最大にするように働く。(Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.) (S&W 1995; 260)

(15) は人間の認知の一般に当てはまる原則であり、発話解釈だけに関係したものではない。

発話解釈にあたっては、話し手は何らかの情報を持っていることを聞き手に明示的に分からせ、その情動的意図を相手に知らせたいという伝達的意図をもっているということが前提としてあると RT は考える。人はひとつの思考を伝えようとして言語形式にのせる。話し手はその思考が相手の注目を引

く価値があると信じ、相手（聞き手）に何がしの労力 (processing effort) を払うことを要求する。一方、聞き手が労力を払おうとするのは、何がしの見返り (reward) が得られると期待するからである。相手の注目を要求する伝達者は、その報酬として、あなたは適切な関連性を有する情報を手に入れることを保証しているというのが RT の主張である。

このように効果と労力のかげ合わせの中で、関連性が規定されるので、「最大の関連性」でなく「最適 (optimal) の関連性」ということばを使う。あらゆる発話は、それは顕示的伝達行為であるが、受け手がそこに最適の関連性があるものと期待し、解釈のための労力を払うよう仕向けられるものなのである。そこで、第二の関連性の原理は次のように定義される。

(16) 第二の関連性の原理＝伝達的関連性の原理 (Second or Communicative Principle of Relevance) :

すべての顕示的伝達行為は、それ自身が最適な関連性を持つことを見込んでいる。(Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.) (S&W 1995; 260)

つまり発話をするということは、「私の話を聞きなさい、あなたの認知環境の改善につながる情報が解釈のための不必要な労力を払うことなしに得られますよ」という呼びかけが行われているということである。そして(16)は人が情報授受を行う際例外なく、いつでもどこでも誰にでも起こっている一般的な原理であって、使うよう規制されたり、時として逸脱してしまうというものではない。

S&W は情報というものは、百科事典的知識として個人の記憶の中に貯えられていると想定している。聞き手は頭の中の無数の想定の中から、発話解釈の推論の前提として使われる想定、すなわち適切なコンテキストを瞬時に選び出し、その結果話し手の意図通りの解釈を復元する。たとえば、話し手が「昔の恋人はどんな人であったのか」ということを尋ねられ、(17)と返答をする。

(17) He was a Japanese man.

(17) の発話の中には、「日本人の男性」という 1 つの塊となる情報があり、その百科事典的知識から解釈可能な文脈想定をたとえば (18) のような想定を、いくつか呼び出すと考えられる。

(18) a. He is a male-chauvinist.

b. He is a workaholic.

c. He dose not do any housework.

d. He often drinks with colleagues.

e. He likes eating sushi.

f. He has visited Tokyo.

(Matsui 31)

(17) の発話に対して聞き手は、「日本人の男性」という情報の 1 つの塊に蓄えられている百科事典的知識から、(18a) から (18d) の想定は処理しやすいものと考えられる。ところが、(17) の発話を聞いただけで、聞き手は (18e) や (18f) といった、「彼（その日本人の男性）が鮨を食べるのが好きである」といったことや、「彼が東京へ行ったことがある」といったような想定はしにくいものであろう。というのは (18a) - (18d) のコンテクストは、聞き手の注目に値するだけの認知効果が十分に得られると考えられる。しかしながら、(18e), (18f) を聞き手に十分に認知されるには、不当な処理能力が求められると考えられる。すなわち、認知効果を達成させるために、聞き手に正当化されない処理能力を課してしまうことになるのである。つまり、あらゆる発話行為は、(16) に挙げた最適関連性の見込みが、聞き手がプロセスする労力に値するだけの関連性を有するということを保証しているのである。

## 2.2 背景化と前景化

話し手が意図した発話解釈を得るために、聞き手は解釈的仮説を立てるが、

まず発話の明示的内容を理解することが先決である。発話解釈に含まれる推論能力は、演繹的推論過程であるが、その過程へのインプットとして働くのは命題形式である。命題形式は論理形式をもち、概念的表示を形作る。論理形式は、意味的に完全であれば命題となりうるが、そして真偽を確かめうるが、ほとんどの文はその論理形式が命題をなさないものである。たとえば、次の文は真とも偽とも判定できない。

(19) *It was too small.*

(19) の論理形式として、(20) のようなものが考えられる。

(20) *x was too small for y at time t.*

(20) において、*x*, *y*, *t* という変項に値が入れられて初めて真偽を問える完全な命題形式となる。たとえば、(20) の場合、聞き手は (21) のような命題形式を復元するかもしれない。

(21) *The shirt which mother bought me on April 1, 2001 was too small for me to wear on July 21, 2001 when I read a paper.*

前述したように (注 1 参照)、命題形式復元、すなわち表意表出に 3 つのタイプが区別される。すなわち指示付与 (*reference assignment*), 一義化 (*disambiguation*), 及び富化 (*enrichment*) である。(19) から (21) の表意を復元する操作は *it* の指示付与及び富化である。以下 *it* と *that* という指示表現に対して指示付与が関連性の原理と一致する基準によっていかに同定されるかということを見ていく。

指示表現 *it* / *that* の意図された先行詞の選択や指示物の付与には、「呼び出し可能性 (*accessibility*)」という概念が中心的役割を演じると考える。いかに呼び出し可能性の想定によって、複数の候補の中からどれが *it* によって指示

され、どれが *that* によって指示されるのか、という問いに答えるものである。「呼び出し可能性」は、対象物を背景化するという概念と結びついていることを主張したい。K&T が、一方の指示候補が選択されるのは「先行知識」の故であると述べているのも、呼び出し可能性の容易さや程度と呼応すると暗示的に想定しているとも考えられる。話し手と聞き手の間で先行知識に依存するという事は、その想定する指示物が背景化している (*backgrounding*) ということであり、RT の話し手聞き手の分ち持っている百科事典的知識とも相応する<sup>2)</sup>。

まず、次の例によって呼び出し可能性の実際を見てみよう。

- (22) a. Tim got rid of his old video recorder and bought a new one yesterday.  
It wasn't really broken.
- b. Tim got rid of his old video recorder and bought a new one yesterday.  
It was on sale.

先行詞 *it* の候補として、2つの指示物 (*old video recorder* と *new one*) が同一の発話内にあり、したがって、両者とも先行知識 (*prior knowledge*) であると考えられるが、自然の発話では *that* よりも *it* が選ばれる。さらにその *it* は (22a) では、古いビデオレコーダーとして、(22b) では、新しいビデオレコーダーとして解釈される。第一発話の解釈のあと、「壊れている」という想定は古いビデオと結びつき、「セール中であった」という想定が新しいビデオと結びつくというのは、ごく日常的なシナリオである。

一方、2つの先行詞の間で前景化 (*foregrounding*) したいもの、すなわちポイントイングする必要があると話し手に知らしめたい場合は、*it* でなく *that* の使用をさせると考えられる。たとえば、(23)において、

- (23) We put the ice-cream machine in the playroom.
- a. It is chiefly used by children.
- b. That is chiefly used by children.

聞き手が先行詞としてどちらを選ぶかの判断は、K&Tの先行知識では説明できないと思われる。ここではプレイルームは後続の発話に先立って存在するものであり、アイスクリーム製造器はフォーカスとなる対象物である。K&Tによれば、*it*はプレイルームを指し、一方 *that* の使用はアイスクリーム製造機を指すと説明されることになろう。しかしながら、ネイティブ・スピーカー (NP) の反応は必ずしもこれと一致しない。すなわち *it* が製造機を指とする解釈もプレイルーム指示と共にあるのである。また *that* は使わないと明言した NP もいる<sup>3)</sup>。ではこのスタイル上の差異はどう説明すべきであろうか。園内にアイスクリーム製造機を置くのはどうかという状況で、危惧に反して子ども達が使っているという解釈を復元すれば、*it* はアイスクリーム製造機を指示し、それが話し手の意図したことなのである。一方、同じ状況で *that* がアイスクリーム製造機を指示すると解釈されるとすれば、たとえば訪問者や親たちのために入れたつもりがそうではないという意図を復元することになるであろう。また、アイスクリーム製造機をどこに置くかという議論があったあとの発話であれば、第二発話は何故プレイルームに備え付けたのかという理由を提供することになり、*it* がプレイルームを指示すると解釈されよう。言いかえると、*that* の使用は2つの候補対象物の中で一方を「指差す」という根拠であると主張できるかもしれない。対照的に *it* はそういった指差すという根拠を有していないといえよう。もう1つの例を見てみる。

(24) We stopped for drinks at the Bay Sheraton Hotel before going to the Disneyland. It was crowded.

(24)の2つの先行詞のうちで、*it* が the Bay Sheraton Hotel を指示すると解釈される。第一発話の後で、聞き手はホテルで飲んだことについて何かを聞くであろうと予期するからである。

これまでの例を見てきて、何時どんなときに、なぜ *it* と *that* の交替による不適切な発話が起るのか、あるいは一方がより好まれるのか。一方しか許されないのかという問いは興味深く、かつ重要視すべきことが分かる。

## 2.3 2つの呼び出し可能性

ここでは、呼び出し可能性を2つのタイプに区別して考えることを提案する。1つは、先行詞そのものの呼び出し可能性であり、もう1つは、可能な文脈想定（文脈情報）の呼び出し可能性である。まず、(21)の例を見てみよう。

(25) I prefer England to France. The wine is better.

- (26) a. The wine produced in England is better than that in France.  
b. The wine produced in France is better than that in England.

(25)の発話において、ワインの呼び出す暗示的先行詞はイングランドかフランスか、すなわち(26a)と(26b)という2つの解釈が可能である。第一発話を聞いた後では、イングランドの方がフランスよりも呼び出し可能性が高いということになり、(26a)が十分な認知効果を達成するという意味で、意図された解釈である。したがって(26a)の解釈が、聞き手に正当化されない（余計な）労力を課さない解釈ということである。すなわちイングランドが呼び出し可能性の高い先行詞である。対照的に、(26b)は聞き手に正当化されない労力を課し、イングランドを遠ざけるので、関連性の原理と一致する解釈とはならないということである。

第二に、先行詞そのものの呼び出し可能性に加えて、処理能力に影響を与える要素として、文脈想定（文脈情報）の呼び出し可能性がある。2つの候補が同じ程度に呼び出し可能である場合、両者は平行に処理され、先行発話の解釈として許容されうるコンテキストを即呼び出せるものが選ばれるということである。次の例を考えて見よう。

(27) Tim eventually got rid of his old video recorder and bought a new one yesterday. The circuit board was broken.



(27) の第二文は2つの解釈が可能である。

- (28) a. The circuit board in Tim's old video recorder was broken.  
 b. The circuit board in Tim's new video recorder was broken.

2つの候補とも同等に呼び出し可能であるとする、聞き手は(28a)と(28b)のいずれの解釈を選ぶか。当然(28b)でなく(28a)が好まれる解釈である。前述したように我々の認知的システムは百科事典的知識を有している。この認知システムは、呼び出し可能なある大きさの文脈情報という枠の中で、適切な認知効果を得られる解釈を求める。前者については関連性を最大にするべく発話解釈にあたるということであり、使われる文脈情報がありうる(plausible)ことであればあるほど、証拠があればあるほど関連性がより大きいことになる。可能な文脈情報の枠が2つ以上あるとき、同じ効果が得られるならば、最も呼び出し易い枠が選ばれることになる。(27)に戻ると、(28a)の解釈は、ティムが新しいビデオレコーダーを購入したであろうという理由を与え、認知効果を達成することが容易である。対照的に、真新しいビデオレコーダーの回転盤が壊れていたというシナリオはありそうもないことである。つまり、新しい文脈情報を補わなければならないから、コスト(処理能力)がかかることになる。したがって斥けられるのである。

さて2つの呼び出し可能性が与えられたら、itとthatの指示付与について、次のような(a)(b)という二仮説を立てる。その前提となる考えは、(29)のようなものである。

- (29) 指示付与は、発話解釈の全体を見て行われるものであるから、その適切な語用論的容認可能な基準は、発話解釈上の原則すなわち最適関連性の見込みと一致する。

- (a) itの照応は、文脈想定(文脈情報)の呼び出し可能性が総合的に高い解釈である。

(b) that の照応は、呼び出し可能性が高いというところで、フォーカスあるいは、際立っている (salient) 部分の解釈である。

次節でこれらの仮説をもとに、実際に、K&T で取り扱った例文などを用い、it と that の差異を再分析し、(29) の仮説の説明力を検証していく。

### 3. 呼び出し可能性の判定と it と that の指示付与

ここでは実際に、指示表現としての it と that の差異を、(29) で示した RT による仮説を基に、文脈想定を選択と際立ち性の二側面からデモンストレートする。

#### 3.1 文脈想定を選択と関連性の原理

まず文脈想定と呼び出し可能性が総合的に高い解釈である it の照応から考察しよう。前出の例文 (3) を見てみよう。

(3) She bought a blanket during her lunch hour  
and brought a. it back with her to the office.  
b. that

it も that も対象物を指し示すものがあるとすると、先行詞としてブランケットしかありえないのだから、it も that も同一のものを指すことは明らかである。買い求めた毛布を持ち帰るということは、ごく自然なシナリオとして存在する。そのため (3) のシナリオは、文脈想定と呼び出し可能性の高い解釈ということから、it の使用が妥当であると考えられる。しかしながら、第一節で「ランチタイムに出かけて何をかうのかと思ったらなんと毛布だったんですよ」というようなコンテキストでこの毛布が焦点になっている場合、that の使用が容認されると考えられる。しかしながら、that が使われるよう

なコンテキストは、it が使用されるようなごく自然なシナリオよりも呼び出し可能性が低く、it のほうが文脈想定呼び出し可能性が高いと考えられる。また (6) では、

(6) A: Fred arrived even later than Sally.

- B: a. I know that.  
 b. I didn't know that.  
 c. I know it.  
 ?d. I didn't know it.

(3) と同様に、it も that も指し示すものは、「フレッドがサリーよりも遅く到着した」という前発話の内容である。聞き手はフレッドがサリーよりも遅く到着したという事実を知ったことを、その応答として発話する。発話解釈の過程で背景知識としてこの事実を受け止め、いわゆる文脈想定呼び出し可能性が総合的に高い解釈として (6c) の解釈が復元される。(6a) はこの事実を際立たせる。動詞 know は目的節の内容が真であることを要求するのであるから、それを際立たせないで否定することは語用論上容認されないことである ((6b) と (6d) の容認性の違い)。

前発話の内容を指し示す例として、さらに (10) を検討しよう。

(10) Fred may have told me that he wanted to be a pilot,

- but I don't remember a. it.  
 b. that.

(10) では、but の使用により、第一発話の内容から引き出される推意が but 以下の内容と矛盾することを伝えることになる。パイロットになりたいと言ったことと矛盾することは何かという予測を立て、これを思い出せないという解釈が即復元されれば、それが it を使用した話し手の意図したものなのである。すなわち、少ない処理労力で解釈がなされる。ということは、前半の内

容に対しての文脈想定呼び出し可能性が高い解釈になるわけである。一方、that の使用は何をポインティングしているのかを聞き手に探させることになるが、思い出せないのは言った行為ではなく、パイロットになりたいという内容であることをポインティングしていると聞き手は解釈することによる。この意味で K&T のいう that は先行知識の狭さに関わるとすることと一致するといえる。

次に (11) を見てみよう。

(11) [A middle-aged father and his 25-year old daughter are observing a young man on the street below pushing a baby stroller with an infant inside, evidently his own child.]

Father: Look at this! There's some young guy taking care of his own kid!

Daughter: You see a. it a lot around here, Dad.  
b. that.

話し手にとって目の前の視覚的な情報はごく自然なまたは日常的なものとして存在するものである。したがって、it の使用によって文脈想定呼び出し可能性の高い解釈として聞き手に復元される。一方、(11b) では目の前情報をポインティングし、前景化したものとして提示していると聞き手が解釈することになる。同様に (13) では、

(13) First put the vase on a table, then take a picture of a. it  
b. that

(13a) は、テーブルに花瓶を置いてそのあとどうするのかという予測のあと写真撮るという情報が与えられていると、背景的知識として「花瓶」が即呼び出し可能な文脈想定である。

以上見てきたように、文脈上での it の使用は、文脈想定呼び出し可能性

が総合的に高い解釈であるものに許容される。しかしながら、本節で提示した K&T の例文の中でも that の使用が許容されるもの、いわゆる呼び出し可能性が高く、かつ対象を際立たせている部分の解釈が存在することを確認したい。

複数の指示対象物の中で、呼び出し可能性はより低いですが、それが対象物であることを指差し際立たせることによって、正しい指示付与を行う。この機能を有するのが that である。上記 (3b), (10b), (11b), (13b) はいずれも文脈想定と呼び出し可能性の高いところで、it によって指示されない対象物が that の使用によって呼び出され、話し手の意図したものとして優先されるということである。このことを提示していると思われる例を見てみよう。

- (4) Tom knew that Joanne wanted to sell the car,  
and ?a. it bothered him considerably.  
b. that

例文 (4) において、it でなく that の使用は聞き手にジョーンが車を売っていたことこそがトムを困らせていることであることを悟らせる。いわゆる前の that 以下の命題を際立たせることになる。この前節の内容を際立たせるという話し手の意図が、that の使用をさせるのである。同様に (10b) は、that の使用により、前節の内容そのものに対しての文脈想定 (文脈情報) ということではなく、言われた内容そのものをポイントティングし際立たせたいというのが話し手の意図として示される。また同様に、(11) において、that は目の前の視覚的情報を指し示していると考えられる。すなわち、指差しができるものである。明示的ではないが、話し手と聞き手の間で、指差しがされている対象が了承されているということである。(E&T の説明とは逆になることになる。) 指差しが行われている、いわゆる対象がフォーカスされている、または際立っているものと考えられる。同じことが (13) の that の使用にもいえる。第一節でテーブルに花瓶を置いて、その花瓶についてどうするのかという予測のあと写真を撮るという情報が与えられていて成立する解

釈であり，that の使用はテーブルの上の花瓶を置くこととという行為を一体化し，この一体化という行為を行うことで，対象物をフォーカス，または際立たせていると考えられる。最後に (8) を見てみよう。ここでのカールの it の使用について次のように説明される。いくつかの指示候補がある中で，すべて次から次へとつながっていて，1つのストーリーをなすと考えられ，この一連の事象全体は目下手のひらの上にあるもので，即呼び出されうるものである。一方，(9) の状況を明らかにして，その会話の中の1つの事象——サンフランシスコへ引っ越すこと——をポイントすることになる that が使用されれば，聞き手はこの際立たせた事象を指示するという正しい解釈を復元するのである。

### 3. 結び

本小論で，指示表現としての it / that の差異を，話し手の意図した解釈を得るために，発話内容と文脈想定がどう絡み合っているのかという観点から関連性理論による仮説を立て，K&T の解釈を再検討していきながら説明してきた。2つの指示表現が話し手の意図した解釈を得るために，発話内容と文脈想定がどう絡み合っているのかに関して，選択的な役割をされると考えられる呼び出し可能性の概念を提示した。これを先行詞の呼び出し可能性と文脈想定 of the呼び出し可能性の2つに区別した。指示表現 it / that の照応する先行詞の選択と解釈には，呼び出し可能性の概念がいかに中心的役割を演じているか，そして文脈想定 of the総合的な高さや先行詞の際立ち性が，いかに一方を選ばせるかということを示した。複数の指示物候補の中で it は人間の持つ百科事典的知識との関係で呼び出し可能性の高い文脈想定を指示するものとして解釈され，一方，that の使用は呼び出された文脈想定の中で際立ちを示すことを意図しているものと解釈されると主張した。(29) で示した仮説がこの2つの指示表現の差異を一様に示すことを可能にしたと思う。今回は指示表現としての it / that のみを考察したが，これらの指示表現と日本語にあるゼロ代名詞との関わりが興味深い。今後の検討課題としたい。

## 注

1) コード化されている言語表現そのものは、真偽関係も問えないほど不完全なものである。コード化された言語表現を話し手の意図した命題内容に復元し、表意として伝達される過程には本稿で関わる指示付与に加えて次のような操作が含まれる。

- (i) あいまいな表現の一義化 I went to the bank.  
 (ii) 省略されている要素の補充 There's nothing (worth watching).  
 (iii) 漠然とした表現の特定化 Megumi is Japanese and (in spite of that) she hates sushi.

(ii) と (iii) は富化 (enrichment) と呼ばれる。これらの操作が終わって真偽を問える命題レベルに達し、伝達されれば表意と呼ばれる (詳しくは武内 (2000) 参照)。

2) 発話解釈の際呼び出される想定は、話し手と聞き手が分ち合っている知識だけでは RT は考えていない。例えば、(i) のやりとりにおいて、

- (i) A: ぼくの最近出た本読んでくれた?  
 B: ぼくは二流作家の書いたものは読まない主義でね。

(ii) A は二流の作家である。

B の発話解釈にあたって、A は (ii) を文脈想定に取り込み、B の意図した解釈、すなわち自分の本を読んでいないことを導出する。しかし、(ii) の想定は B の発話を聞くまでは A が持っていたものではないし、さらにその発話解釈の後でも信じているものでもなかろう。RT の考えるコンテキストは単に先行知識、共有された知識だけではなく、したがって前もって与えられているものと考えないのである。

3) 神奈川大学外国語学部および外国語学研究科に在籍する NP 3 名に本文に提示した例文について、it / that の指示するものチェックを依頼したが NP の間で it / that の指示するものの一致が必ずしもなかった。that または it は使わない (使えない)、または本文中にはない何か別のものを指し示す、it / that の両方とも同じ対象物を指示する、というような様々な反応があった。

## 参考文献

- Grice, P. (1975) "Logic and conversation". *Syntax and Conversation 3: Speech Act*. Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) Academic Press, New York, 41-58. Reprinted in Grice (1989). *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press, Cambridge, MA.  
 Kamio, A. and M. Thomas. (1998) "Some Referential Properties of English It and That". *Function and Structure*. Kamio, A. and K. Takami (eds.) John Benjamins. 289-315.  
 Matsui, T. (2000) *Bridging and Relevance*. John Benjamins: Amsterdam.

Sperber, D. and D. Wilson. (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*,  
Oxford: Blackwell.

武内 道子. (2000) 「論理形式と表意」『英語青年』2000年10月. 17-19.